

コロナ禍での学生生活とゼミの始まり

2020年に中央大学国際情報学部に入學してからは、新型コロナウイルス感染症の蔓延によって私の思い描いていた大学生活とは大きくかけ離れた生活を過ごしました。授業はすべてオンラインでの開講となり、仲間を作ることも簡単ではありませんでした。時折、理想と現実との差に落胆してしまふこともありましたが、そんな私にとって大きな転機となったのが2年後期から始まった「国際情報演習Ⅰ」、いわゆるゼミの授業です。私は1年生のときから同学部教授の須藤修先生のゼミに入ろうと決めていました。私はこの須藤ゼミでの経験を経て、大学生としての「本当の学び」を知ることができたと感じています。

ゼミでの活動

須藤ゼミは、DXやAIの社会的インパ



ゼミのメンバー

クトについて研究するゼミです。須藤先生がAIに関する省庁会議の参加や国際団体による倫理文書の作成に携わっていることから、授業ではAIについて特に焦点を当てて学習しました。授業の各回で、スタンフォード大学が発表した「Artificial Intelligence Index Report 2021」の要約をメンバーで分担して発表したのち、議論をしていきます。国ごとのAI論文発表数

ゼミで開けた私のこれから —情報処理学会での発表を経て—

国際情報学部国際情報学科3年
私立中央大学杉並高等学校(東京都)出身

とみしま ゆうすけ
富島 悠介

や大学のAIに関する授業、倫理に関する文書の発表数など、自分では調べがつかないようなAIに関する定量的データについて学ぶことができて非常に興味深かったです。さらに通常のゼミに加えて、企業の方の講演を聴いたり企業が開催している研究会に参加したりと、非常に貴重な経験にも恵まれました。私の代はゼミのメンバーが13人いますが、一人ひとりのモチベーションが高く、100分の授業が終わるころにはヘトヘトになるほど集中力を使います。

ゼミメンバーと臨んだ 学会発表

「ゼミで学んでいることをアウトプットできないか」と考えた私は、2022年に開催される情報処理学会の全国大会にメンバーとともに参加することを決めました。しかし、発表までの道のりは決して楽ではありませんでした。

私たちの班は「顔認証システムの倫理



的課題について「人工知能とバイアス」と題して、AIを用いた顔認証システムの肌の色による偏った結果が及ぼす社会的影響と、その解決策について考察しました。論文作成にあたり大変だったことは、作成をすべてゼミの授業時間外で行わなければならないことが多かったです。メンバーと日程調整を行い、日によっては対面とオンラインを使い分けて話し合いました。内容面においても、解決案作成の際に意見が分かれ、何日も議論を続けました。須藤先生にも助言をいただきながら、最終的には行動経済学の「ナッジ」を用いた解決方法の提案を行い、発表しました。結果として、学生セッションにおいて学生奨励賞を受賞することができました。

今回の情報処理学会での発表を経て、私は大学生としての「本当の学び」を経験することができたと感じています。これまでのオンライン授業では決して得ることのできないインスピレーションを得られました。さ



情報処理学会第84回全国大会、学生奨励賞の賞状

らに論文作成のための調べ学習においても、多岐にわたる論文や書籍、ディスカッションを通じて、知識を深めて研究することの意義を学びました。私にとって今回のテーマは、これからの大学生活で研究を続けていく価値のあるものであると確信しています。このような素晴らしい経験を味わうことができたのも、須藤ゼミの環境あってこそだと考えます。



学会発表に関するWEBページ

iTL AI 研究会

須藤ゼミで活動すると同時に、私は今「iTL AI 研究会」にも所属しています。「iTL AI 研究会」は2021年末に準公認部会に認定されたばかりの部会で、須藤ゼミと同様にAIとその社会的課題についてオンラインにて勉強会やディスカッションを行っています。技術、法律など豊かな分野を専門としている部員とともに、ゼミとは異なる視点での考え方を学修できます。私は12月から研究会の代表を務め、より充実した活動になるように日々努力しています。

iTL AI 研究会の活動をjする筆者と部員(筆者は一番左)



情報処理学会でオンラインにて発表する筆者

最後に

す。ゼミで学んだ内容を研究会で共有したり、逆に研究会で学んだ知識をゼミに持ち帰ったりと、私の学びを広げるための重要なコミュニケーションの一つとなっています。

私は須藤ゼミに所属するようになってから、今までの大学生活とは比べることができないほどの貴重な経験、学びを味わうことができました。さらに学会での発表を通じて、これからの大学生活やその先の道しるべとなる分野に出会うこともできました。2年後期の半年間は、私にとって確固たる礎を創る貴重な時間となりました。ゼミとしての学修はあと1年半続きます。須藤先生、須藤ゼミのメンバーとなら、より高いレベルへとステップアップできると私は確信しています。